

ポットまきについて

草花の種まきは一般的には、播種床を設けてまき、発芽成長の後に移植、ポット上げなどをしますが、その他の方法として、「ポットまき」があります。

1、ポットまきはこんなときに行う

①移植が難しいものを直まきできない場合

移植に弱く、かつ発芽が容易なものは、直接花壇にまけます。しかし、発芽後に害虫に食われたり、雑草に負けたりすることが危惧されるときにはポットまきします（ポットまきなら灌水や手入れが比較的容易にできます）。また直かにまきたいのだけどその場所にまだ他の植物が植えられているときは、ポットにまいておき、場所が空いたら移植します。

②小さな草花で移植などに手間がかかるとき

スイートアリッサムなど、ごく小さな草花は移植が手間がかかります。ポットにまいて、適宜間引きして仕立てます。

③早く大きくさせたいとき

移植後1週間くらいは植物は活着することに専念し、その間生育が止まります。いろいろな理由で早く大きくしたいときは、ポットまきならこの生育停止期間が省けます。

2、ポットまきの要点

<用土>

- 一般に播種用の土は、肥料分が少ないため、発芽後かなり長期間生育させるポットまきの用土には向きません。
- 丈夫な植物で発芽と発芽直後の肥料負けしない植物ですと、培養土をそのまま使います。
- 発芽と発芽直後の肥料負けが心配な場合は、肥料分のごく少ない培養土をとくにつくり、まいた種子と離れた鉢の下層に緩和性の化成肥料などを入れておきます。
- 一般に発芽期は成長期に比べ、水分と空気を要求しますので、上記の培養土は通常使う培養土よりも水もちと通気性のよいものにするとう�효的です。
- ごく微細な種子のポットまきは、培養土の上層部に播種用土に置く二重構造の用土にするのもよいでしょう。

<よく発芽させ、よく初期生育させるためには…>

- まいた後の水やりは種子が中央から隅のほうに流れやすいので、種まき前に十二分に水を土に与えます。
- 嫌光性の種子は覆土後に光を遮っておきます。好光性の種子は覆いをしませんので土の表面が乾燥しないよう注意し、発芽日数が長いものは種子が流れないように丁寧に水やりします。
- 発芽後はよく日にあて、土を乾かし気味にして徒長しないよう注意します。
- 最終的に1本植えにする場合、数本発芽していたら少しずつ間引いて2本にし、最終的には1本にします。
- ポットまき用にとくに水もちをよくした用土を使った場合は、過剰灌水にならないよう注意します。

3、ポットまきの苗を植えつける際の留意点

- 底孔から根が見えるころから移植適期になります。一緒にまいたもののほとんどがその段階に来ているのに全然根が出ていないものを選別して除去します。
- ポットを横に持ち側面を軽く叩くとスッパリ土ごと株が抜けますので、土を崩さぬよう丁寧に植え穴に移植します。丁寧に扱ったのに土が崩れるものは、根の張りが悪い、移植適期でないなどの「わけあり苗」です。

「園芸用語の解説」

○嫌光性種子と好光性種子

暗い所でないとよく発芽しないものを嫌光性、光があったほうがよく発芽するものを好光性といひます。嫌光性のものは、発芽に気づかず覆いをしたままに置いてモヤシにすることがあります。好光性のものは土の表面からの水分の蒸発で土を乾かしてしまう恐れがあります。嫌光性と好光性のどちらなのかは、若い学生なら種類ごとに棒暗記して覚えていけますが、ある程度年齢がいくと失敗して覚えていくことのほうが多いようです。したがってついでに、発芽までの日数をも注意するようになります。ハウスでは必ずしも嫌光性と好光性をきちんと区分してないこともありますので、ご家庭でまくときは種袋や参考書で確認するくせをつけておくことをお勧めします。